

特別寄稿

## 青少年・医療・真宗

——真宗の現代的意義

紫 英 人

世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、若し孤・独・幽・繫・疾・病、種々の厄難・困・苦の衆生を見ては、終に暫くも捨てず、必ず安穩ならしめんと欲し、義を以て饒益し衆苦を脱せしめて、然る後に乃ち捨てん。

〔勝鬘經〕十大受章・第八受

はじめに

まず、一九八三年一二歳で得度し、一九九七年に医師免許を取得した私は、二〇〇〇年大谷専修学院で一年間真宗について勉強させていただきました。その後は、自分なりに機会を見つけては、学びを深めようと努力はしていたものの、その学びを、学院にいたときのように、確認するということがなかなか出来なかった私は、ある時京都光華女子大学真宗文化研究所に学外研究員というものがあることを知り、学院卒業後五年になる今年、ここで一年間かけて自分の学びの確認をさせていただきたいと思い、昨年応募させていただきました。そうしたところ、研究所の皆様は温かい心遣いで今年その機会を与えていただきました。普段は忙しく、なかなか研究所の行事にも参加できず、研究

所の皆様にご迷惑ばかりおかけしてしまいました。だからこそ、と言ってはあまりにも身勝手かもしれませんが、学院卒業後のこの五年、特にこの一年の自分の学びの報告をさせていただきたいと思います。そして、この私の報告に皆様からご意見をいただけたら、さらに今後の学びの道しるべとなることと思います。

### いのちは誰のものか

わたしはよく人から、「あなたの課題とするものは何ですか」と言う質問を受けるのですが、私は常に「いのちは誰のものか」ですとお答えさせていただいております。そうすると、それは信國淳先生の本のタイトルと言うこともあって、私はお会いしたことはないのですが、信國先生に本を通して出会わせていただいた、そういうお話になるのです。しかし、実際お会いしたこともない信國先生に出会わせていただいたきっかけと言いましょか、縁は、大谷専修学院です。信國先生は前大谷専修学院院长であったかたです。その大谷専修学院に私は二〇〇〇年度の一年間お世話になったわけですが、その学院で現在の院長であります竹中智秀先生が入学後最初に言われたことは私の課題である「いのちは誰のものか」ということに出会うきっかけとなった言葉であり、私の原点でもあります。それは、「我々は、あなたは誰なのかと問われたら、どのように答えられるだろうか。我々は自分が誰であるのかを分かったこととして生きている。しかし、あらためてあなたは誰なのかを問われ、また自分は誰であるのかを自問してみると、自分がよく分かっていることに気がつくだろう。」

仏道の世界では誰でもみな、仏になろうと願っているものとしてみいだされ尊敬される。そのため、我々が仏道に縁を結ぶとき、大事なことは我々自身が仏になろうと願っていることを知ることである。

そのとき、我らの生活は成仏道の歩みとなっていく。」

というものでした。この言葉がなぜ私の原点なのかというにはもう少し説明を加えなければなりません。とい  
うのは、はじめに、を読んでいただいて疑問に思われたかたもいるかもしれませんが、私は医師免許を一九九七年に  
取得し、医師として働いておりました。その私がどうして一年間大谷専修学院に行ったのかということですが、大谷  
専修学院は全寮制で一年間仕事をすることは不可能です。ですから、私は学院にいた間は休職をしておりました。と  
言うか、自分の中では医師を辞める覚悟で入学しました。では、なぜ医師を辞める覚悟になったのかといえ、医師  
として働く自信をなくしたからです。と言うか、人間として生きる自信を失っていました。だからといって、自分で  
死ぬことも出来ませんでした。詳細はここでは語りませんが、そんな私が大谷専修学院に入学したのです。その時も  
そうですが、いまだもってなぜあの時専修学院だったのかと言うことは謎です。そんな私が最初に出会った言葉が私  
は誰なのか、という竹中先生の言葉でした。しかし、今こうして、竹中先生の言葉を私の宝物のようにお話ししては  
おりますが、初めてその言葉を聞いたときはそうでもありませんでした。私は誰かと言われても、私は「紫英人」で、  
いつ生まれて、どこで育って、どういう学校を出て、どういう仕事をしていたものだという、自分の中に言う言  
がいたからです。さらに言えば、「そのため、我々が仏道に縁を結ぶとき、大事なことは我々自身が仏になろうと願  
っていることを知ることである。」と言われても、私は入学したときには仏道に縁を結ぶなんてことは全然考えてお  
りませんでしたし、自分が仏になろうなんて思うどころか、そんなことを思ったら人間として傲慢で、赦されないこ  
とのように感じましたのを今でも覚えております。しかし、そうは言っても、先ほども言いましたように、自分の力  
では生きることすら死ぬことも出来なくなっていた私は、その言葉を信じる信じないは別として学びをはじめること  
になりました。そして、その学院生活で出会ったのが、そんな私を見てある先生が私に紹介してくださった「いのちは  
誰のものか」という信國先生の本でした。その中で信國淳氏は次のように述べられております。

「いのちは誰のものか」という問いは、厳密に言いますと、いのちはどういう我によって所有されるべきものな

のか、あるいは、いのちはいかなる我によって所有されるべきものなのか、あるいは、いのちはいかなる我に属き従うものであるのか、という問いでなければならぬことになるでしょう。」(信國淳著「いのちは誰のものか」一三頁)

ここに出会ったときはつきりと答えが見えただけではありませんが、ただ私が見失っていたものの方向性が実は逆だったという事に気づかされたわけです。すなわち、失った患者さんのいのちに悩んでいた私でしたが、実は私自身のいのちが見失われていたわけです。そんなこともあって、医師を辞めようと思っていた私は、もう一度医師をやってみようと思ったわけです。それも、以前とは違った形でと思い、自己流かもしれませんが、私が課題とする仏教を取り入れて、医師をさせていただいています。

## ビハーラ

ところで、私が医師として仏教を取り入れてと申ししても、いま話題のターミナル医療の現場でのことではありません。仏教と医療といえますと、いわゆるホスピスの連想から、ご存知の方ですと、ビハーラという言葉を感じることでしょう。長岡西病院というビハーラを実践されている病院のホームページによりますと、「ビハーラという言葉は、古代インドにおいて仏教教典などに使用されたサンスクリットという雅語であり、「休養の場所、散歩して気晴らしすること、仏教徒の僧院、または寺院」というような意味を持つ、往古ビハーラと呼ばれた仏教施設は、「一には病人に供給す、二には病のために医薬の具を求む、三には病者のために看病人を求む、四には病者のために法を説く、……」と言うような諸機能を果たしたといわれております」とあります。そういうことからしますと、聖徳太子が創建された四天王寺内に設けられた四箇院はビハーラを実践された場であったことが思い出されます。四箇院は薬草の栽培と薬の製造を行った施薬院、身寄りのない病人や四天王寺に学ぶ比丘たちの病の治療を行う療病院、

家のない人、家族の世話を受けることのできない人たちを収容し、元気を回復した人には四箇院の中で職を与える悲田院、そして仏の教えを学ぶことによつて、他の生命を尊重する心を育てる学場といわれる敬田院の四つです。長岡西病院のホームページで言われているビハラー、四天王寺内の四箇院、いずれも今言われているような、ターミナル医療について直接的に意味するものではないように思われます。ではなぜ今、ビハラーということがターミナル医療のことを強く意味するかといえば、私の少ない知識によれば、Death education & Death counseling、すなわち死学、そしてその死を学ぶことから生きることを学ぶ死生学というものが重要視されるようになったからではないかと思えます。かつては、日本はもとより世界的にも死を語ることはタブーであったような風潮が田代俊孝氏も言われるように「死が社会問題化する中で、そこから、自分が死に直面したとき、どうしたらいいか。さらに他の人が死に直面したとき、どうサポートしたらいいのか。文字通り、死への準備」という形でそれが課題化され、それが教育という形で実践され始めたのである。」（田代俊孝著「仏教とビハラー運動」九頁）変化してきております。その死への準備ということが日本で浸透するに当たつて、かつてからキリスト教ではホスピスというものが言われていた中で、仏教に言われていたビハラーが本来であれば一部であるところのものが、それがすべてかのような意味づけになっているのが現状ではないでしょうか。もちろん、あらかじめ断っておかなければいけないこととして、ホスピスとビハラーは似ているかと思われませんが、同じではありません。ここでそれを細かく言うつもりはありませんが、その違いの一つとして、やはり死のとらえかたは大きく違うと思います。それについて、田代俊孝氏は先ほどの言葉の後に次のように述べられています。「しかし、それは、どこまでも、生から死、生の向こうに死があるという連続的立場に立つてのものである。その意味では、死を生にとりこみ「生死一如」つまり、生と死を同時的に、あるいは、死に応える生という逆説的発想の東洋的あり方とは、いささかその趣が異なる。」（田代俊孝著「仏教とビハラー運動」九頁）と

さて、私が医師として仏教をベースに診療させていただくということは、今日日本で言われているターミナル医療のビハラーではなく、本来のビハラーとしてのものであります。そういたしますと何か私に今までにはない、仏教を一人体得し、それを実践しているかのように聞こえますが、そんなことではありません。と言うか、そのようなこと(そのようなことがどのようなことかも本質的に分かっているわけではないのですが……)ではなくて、身近に体や心が病んでいたら、それが癌であろうとなかろうと、不治の病であろうとなかろうと、ただ医師として診察する、それだけであります。ただそれだけではありませんが、そこに仏教、すなわち私が仏となる教えをいただきたいという、私の課題の一つである、大谷専修学院竹中先生に頂いた「成仏道の歩み」を求めるものであります。

先ほど言いました、身近に体や心が病んでいたら、それが癌であろうとなかろうと、不治の病であろうとなかろうと、ただ医師として診察する、ということについて、私が実際にどういうことをしているかといえば、いわゆるカウンセリングを診療に取り入れさせていただいているということとです。カウンセリングとは、「基本的には相談や面接を指して使われる用語であり、一般に不安や悩みをもつ人に対して、原則的に一対一で面接して相談相手となり、相談したい人の「自らの気づき」を促し助言・指導を与える行為」(富田和巳監修「小児心身医学の臨床」二〇六頁)と書かれております。ですから、一般的には大人または小学校高学年以上の子供といった、言語能力が高いものまたは十分なものに対して適用されるとも言われています。

しかし、私は言語能力が高いとか十分ということに疑問を持っております。普通心理学一般的定義づけにおける言語能力が十分というのは、自分のことや周囲のこと、思うこと、考えることを言葉にすることが出来るということにならうかと思うのですが、私が普段話す言葉は果たして本当にそれを十分表現しているのでしょうか。また、自らが表現するだけでなく、相手の表現を理解するということも言語能力であると思うのですが、私は人の話が本当に聞

けているのでしょうか。私はうそつきですという人はこの世の中に存在しないということを知っています。なぜなら、正直な人が私はうそつきですといったら、うそつきになり、正直でなくなってしまう、うそつきの人が私はうそつきですといったら、それは正直に言っていることから、うそつきでなくなってしまうのです。ですから、正直な人もうそつきも私は正直ですとしか言いようがないのです。

そんな私が診療にカウンセリングを取り入れるといいますが、その定義も満たしていない中で、何をしていますかといえますと、私の前に来てくださった人と一緒にひたすら遊ぶということをしていただきます。相手は何を考えているかは分かりませんが、本気で遊ばせていただいております。こういう遊びを取り入れた心理学的治療を遊戯療法と呼びますが、教科書的には「遊びは子どもがその心の内界をありのままに、思う存分発揮できる最も自然な心の表出手段である。特に攻撃性、支配性、憎しみなどの、日常では否定されやすい感情の表現も、遊びであるということ子ども自身もまわりの人(親、教師など)も安心して受け止めることができる。また、遊びの中で子どもは様々な感情の体験をし、感情の制御を学んでいく。遊びの中で訓練を積んだ子どもは自信と勇気を持ち、現実的に外に飛び出す力、すなわち社会性を培い成長していく(最近の子どもは幼児期の自然の遊びが少ないために問題が多く出ている一面もあり、これを是正していく)。遊戯療法はこれらの遊びの機能に治療的意味を見出し、心理治療の枠組みの中に遊戯を取り入れたものであり、特に幼児や小学生を中心に用いられる。」(富田和巳監修「小児心身医学の臨床」二二二頁)と書かれています。しかし、私のところで行われる遊びは、もちろん子どもにも遊んでもらうわけですが、何より、私が子供に遊んでもらう、そう言う姿勢であります。ですから私は誰よりも真剣に遊びます。ゲームに勝てば大喜びし、負ければ本気で悔しがります。ですから、心理の専門家の人に言わせれば、遊戯療法と呼べるようなものではありません。

では、そんな私は何をしているのかといえ、先ほどのカウンセリングについての説明文にあったように、「自ら

の気づき」を促しているわけです。自らの気づきを別の言葉で言えば、自分探し、自己理解、他者理解、そして生き方がしとということであります。仏教的に言えば、真実に目覚める、覚者になることであり、それこそ仏になる、成仏道の歩みであるということでしょう。ですから、「自らの気づき」を促すといっても、誰かに促すのではなく、私に求め、私を導いていただく、即ち常に私に「自らの気づき」を促す、そういう診療であります。

## 日々の出会い

そういう私の診療に来てくださる人たちというのはどういう人たちか、と言いますと、普通の風邪や肺炎と言った急性疾患から、前からくり返し頭が痛いとか、おなかが痛いとかという人、蕁麻疹や喘息といった慢性疾患といわれるもので来られる人たちです。その中でも、現在私は総合病院小児科医師として診療に当たらせていただいているので、一五歳未満の子供が多いわけですが、先ほど言いましたように、カウンセリング外来と言うものを通常の外来と別の形でさせていただいているので、そういうものも入れますと赤ちゃんから七〇代の方までいらつしゃいます。

私のカウンセリングに来てくださる人たちの疾患とは、先ほどの疾患でいえば、前からくり返し頭が痛いとか、おなかが痛いとかという人、蕁麻疹や喘息といった慢性疾患といわれるものです。ですから、私のところへ来る人たちは、何かストレスを具体的に感じている人は少なく、一般診察・検査をし、治療している中で、どうも原因が別にあるだろうと言う人たちを対象に十分な説明をしたうえで、カウンセリングに移っていくというのが私のカウンセリング外来で多いパターンであります。

もちろん、私の外来を知った上で、それを最初から目的で、電話で予約し来られる方もいらつしゃいます。そういう人の中に特に印象的だったのが、人を殺したいと言うことが頭に浮かぶ、と言う子もいました。



その中でも多いのは、一〇代の起立性調節障害、不登校です。その他には、チック、気管支喘息、摂食障害、過敏性腸症候群、過換気症候群、円形脱毛症、パニック障害、広汎性発達障害、注意欠陥・多動性障害、心的外傷後ストレス障害と言ったものや、精査しても特に器質的な原因の見当たらない頭痛、腹痛、嘔吐、めまいといった、いわゆる不定愁訴、そしてうつ状態等様々であります。

## まゆ人間

私は専修学院にお世話になっていたとき、院長先生の講義で印象に残っているところがあるので、紹介させていただきます。「現代は多くの人が「傷つきたくない症候群」という病に侵されている、とされている。その為自分自身のことについてもまた他人のことについても、また社会のことについても問題があれば率直に問題があるとしてそのことを問題にしていけば解決のきっかけを見つけることが出来るだろう。しかしそのことを問題にしていけば面倒になり苦勞することになると思えば、見ないこと、知らないこと、関係のないことにして目をつむってしまうことが多い。それが「傷つきたくない症候群」といわれている。しかし、我々はそうすることによって「まゆ人間」化し、自分自身の傍観者になってしまっている。誰でも目をつむれば現実の世界は消えてしまう。そのため自分一人だけの思いの世界に自閉することになる。そうなれば我々が何を思おうと、何を行おうと、それらはすべて幻想となり、バーチャルリアリティー、仮想現実になってしまう。そうすることが胞胎をつくりだすこととして教えられている。しかし、現代はそのバーチャルリアリティーと現実との境界が曖昧となり、突然バーチャルリアリティーが現実の中に出現してることがあり、悲惨な事件が多い。その為我々は非常に危険な時代を生きることになっている。」(竹中智秀 平成十二年六月五日 歎異抄講義「三、摂取不捨の誓願―四、信に死し、願に生きよ」)ここで私が思うのは、例えば、不登

校の子供達は世間からはわがままで、怠け者のように思われることが多いようですが、少なくとも私のところに行く子供達は誰一人としてわがままな子供も、怠け者の子供もいません。ただそこにいるのは、その子供達を一生懸命理解しようといういい人ぶっていないが、実は心のどこかで差別し、自分の思い通りにならない子供のことを、少しでも自分の常識と言うものさしで測れないと、それは私が悪いのではなくて、子供が悪いと、そう思おうとする自分があるのです。そして、よくなったときは私のやり方がよかったからとして、自分の手柄として、世間にアピールしようとする自分があるのです。まさに、この私が「傷つきたくない症候群」を思う、まゆ人間なのです。

ちなみに、院長先生が言われる「まゆ人間」を曇鸞は「蚕繭自縛」と言われており、それは浄土論註のなかで以下のように言われています。「仏本此の莊嚴清淨功德を起こしたもう所以は、三界は是れ虚偽の相、是れ輪転の相、是れ無窮の相にして、蜈蚣の修環するが如く、蚕繭の自ら縛る如く、哀れなるかな、衆生、此の三界顛倒の不清に締るを見そなわして、衆生を不虚偽の処に、不輪転の処に、不無窮の処に置いて、畢竟安樂の大清淨を得しめんと欲めず。是の故に此の清淨莊嚴功德を起こしたこうなり。」で、養輪秀邦氏の解説によれば次のようにあります。「仏がもと、この莊嚴清淨功德を起こされた所以は、三界を見られるに、虚偽にみち、流転し、輪廻は窮まることありません。その相はあたかも、尺とりむしがめぐり歩くようであり、またかきがまゆをつくって自らを縛っているようである。ああ何と哀れなことであろうか、衆生はこの三界の顛倒の不清に束縛されている。その相を見られ、衆生を虚偽なき処、流転なき処、無窮でない処に安住させ、絶対安樂の大清淨の処を得させようと願われたのである。だからこの清淨莊嚴功德を起こされたのである。」(養輪秀邦編「解説浄土論註 改訂版」三〇から三一頁)まゆ人間は虚偽にみち、流転し、輪廻が窮まることのないこの世界で、尺とりむしのようにぐるぐるめぐり、まゆを作っているというのです。ここにこそ、人間の根本煩惱、無明である自我意識があると言わなければならないのではないのでしょうか。

## 砂遊び

ではこれから、私のところに来てくださった人の症例を見ていきたいと思うわけですが、その前に、私の診療で行われている遊びの一つに箱庭療法というものがあります。それについて少しだけ説明をしておきたいと思います。

「遊戯療法の流れの中から考案された自己表現のための技法で、砂箱と模型玩具を使って、一つのまとまった世界を表現する心理技法である。スイスのJung(ユング)派心理療法家Kaufman(カルフ)によって開発された。箱庭療法として単独で実施されたり、遊戯療法の中の遊びの一つとして実施される場合がある。子どもから大人まで適応年齢の幅が広いのが特徴である。

### (1) 方法

#### ① 砂の入った箱

縦五七×横七二×高さ七cm(規格サイズ)

#### ② 模型玩具

人間、動物、建物、木、乗り物等をそろえる。

#### ③ 自由で楽しい体験ができる療法として始める。

一般的には遊戯療法の中に取り入れ、作られた箱庭の風景を分析し解釈することにこだわらず、子どもが自由で楽しい体験ができる療法として始めるのがよい。

#### ④ 治療者の原則

治療者は箱庭を製作する子どもの横にいるが指示はせず、作られる作品を静かに見守ることが原則である。出来上

がった作品は診断的価値がある一方で、継続して作らせることで、作品を物語として読み取っていくと、子どもの問題としている主題が明確になる。

⑤ 患児の自己治療力の促進

砂に触れる感覚的体験(触覚)により退行が促されると同時に、治療者や箱庭の枠という守りから得られる安心感から、攻撃、破壊、再構築などの表現が行われやすくなる。それが具体的な玩具を使って表現され、治療者を直接的対象にしないため、相当激しい攻撃的表現であっても治療者は受け止めやすい。そうして表現が受け止められることによって子どもの自己治療力が高まり治療が進む。(富田和巳監修「小児心身医学の臨床」二二三から二三四頁)

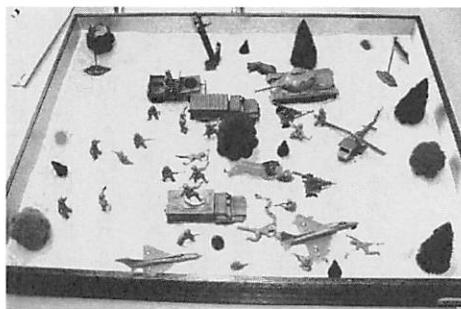
以上がいわゆる箱庭療法ですが、先ほどから何度も言いますように、私のところでは、そんな教科書どおりにはなされておらず、砂遊びとしてご理解いただきたいと思います。

症例A

では、症例ですが、Aは一二歳で、中学一年生でした。一学期の半ばにかぜをひき、その後、かぜ症状は治まったのですが、腹痛が出現し、その腹痛が原因不明で、また、反復するものであったことから、学校に行けなくなりました。そういう子でございます。いわゆる不登校ということで、学校の先生より私のところへ紹介となり、診察させていただくこととなりました。

まず、わたしは問診ならびに一般的な検査を行い、検査においては身体的な異常がないということを確認しました。そこで、症状の起こり方等から、反復性腹痛という診断にいたしました。

反復性腹痛について簡単に説明しますと、反復性腹痛は小児科領域においては五歳から一五歳までによくみられる症状です。その原因のうち器質的疾患のしめる割合は、一〇から一五%程度で、そのほとんどが心理社会的要因や環



「紛争」



「挟み撃ち」

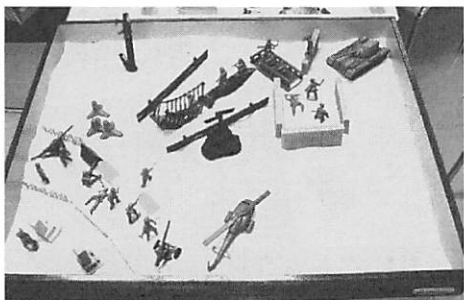
境要因が関与することが多いため、診断お呼び治療が難しいといわれています。その為診断の際には、器質的疾患を鑑別すると同時に、その身体症状を受け入れ、患児との治療関係を作り、家族・学校・社会と連携して心理行動面の対応が必要といわれております。そういう疾患であることを頭において、ケースの説明を進めてまいりたいと思います。

三回目の受診時、今回の反復性腹痛の原因が心因性である可能性が高いことを、A並びに母親に説明し、治療としてカウンセリングを取り入れることを提案しました。とりあえず、カウンセリング室に私と本人、二人で入ると、そこにあった箱庭に興味を示し、作り始めることとなりました。

Aはいきなり世界大戦といっておもちゃをおきだし、さらには、人が足りないといつて一見不規則に並べているようでした。しかし、さらにAは、これは土地争いをしてるんだといいました。この作品を作り終わって、Aはこの作品に「紛争」というタイトルをつけました。

カウンセリング二回目の作品です。Aはすぐに箱庭制作にかかりはじめました。新学期が始まって約二週間でしたが、腹痛はほとんどなく、ちょうどその頃がタイミンクよく学校の文化祭の時期ということで、調子がいいときは学校にも行き始めました。

この作品を作りながら彼が説明するには、中央



「墓を守る」

の軍が、正義で主人公だそうです。そして、左下と右上の軍が悪者かつ味方同士で、この正義の軍を挟み撃ちしているということです。正義軍がはさまれている状況に私は危ないと思い、内心ドキドキしておりましたが、さらにAが説明をするには、この挟み撃ちされている状況を、左上の双眼鏡を持って右上の軍を見ている兵士が気がついているそうです。このとき、この兵士のおかげで私自身すくわれたような気がしました。彼はこの作品に「挟み撃ち」というタイトルをつけました。

そして、カウンセリング三回目です。いつもと同じように作り出すわけですが、前回からの約一ヶ月間学校に毎日行っているとのことでした。このときAは、天皇の墓を守る日本軍だといって作り始めました。さらにこれは、日本対アメリカだそうです。今までの二回の戦いでは、何対何という戦い、ということについては、決まっていなかったAでしたが、今回は自ら日本対アメリカと限定していました。しかし、作りながらAは、英語がしゃべれたら良いのにといい、さらに実は彼が通う英語塾の先生がアメリカ人だとも語ってくれました。そして、その先生の英語はさっぱり分からないということです。私は思わずそのAの言葉に、「分からないなら、分からないとその先生に教えてあげたら。先生は月謝を君からもらって教える義務があるのだから、教えるからには分かるように教えてくださいと教えてあげるべきだよ。」と言ってしまいました。

そして、この作品には「墓を守る」というタイトルをつけてくれました。なぜ墓を守るのかという私の質問に、Aは、人の骨が入るし、きれいにお墓参りをするため、と答えてくれました。

カウンセリング四回目です。このときAは少し風邪気味で言葉が少ないように感



「終戦」



「Happy」(母の作品)

じましたが、箱庭はすぐに作り始めました。言葉がいつもより少ないのと、大きななたを持つた、骸骨の人形を置いたとき、あまり調子がよくないのかなと思いましたが、自由の女神や、マリア像も置かれ、さらにAがこの作品に「終戦」というタイトルをつけたとき、私は前回の墓を守るが急い思いう出され、この骸骨の人形がむしろ、いのちの復活のように見えてきました。

本来であればお母さんと本人の面接は別々の人間がしなければいけないのですが、私は病院の事情で、それを一人で行っております。そこで、お母

さんの面接には出来るだけ子どもと同じことをしてもらおうように努めております。何か症状を訴えている子どもは一人悩んでいるわけではありません。親、兄弟、さらに学校の先生みんなの闇が偶々その症状として現れているに過ぎません。ですから、よく親の面接をするカウンセラーはありますが、私のところでは、可能な限り先生を含めた周りの人たちにも私のところへ来ていただき、同じことをしてもらおうように努めております。その時、周りの人にあなたのカウンセリングをさせてくださいと言うと、周りの人は自分はどこも悪くないと思っておりますから(そこが一番の闇、すなわち「無明の酔」)、自分はどこも悪くないといって気分を害して拒否されるでしょうから、その子の闇と一緒に考えていく上で、その子が今体験していることを経験していただくような形で参加してもらいます。そういうことで第四回目のとき、Aのカウンセリングが終わってから、母親にも箱庭を作ってもらいました。ハッピーとタイト



「救出」

ルをつけてくれました。

そして第五回目、いつものように箱庭を作り始めました。Aは、動物に客が襲われているのを助け出しているんだといって、「救出」と名づけ終わりました。

そして、Aは自ら、もうこのカウンセリングを終わりにしたい、といってきたので、終わることとしました。

それから約一カ月後、母親から突然電話が、かかってきまして、Aが学校を休んだと言ってカウンセリングをして欲しいというのです。そこで、二人に来院してもらい、まず、Aから話を聞くと、二日間、何となく学校を休んだのだが、休んでもつまらなかったのも、今は行ってるから、大丈夫といっって、箱庭を作らずに終わりました。そのことを母親に説明すると安心して帰っていかれました。

今回のようなケースは私の中ではまれで、たいてい不登校の子供が、いったん学校に行けても、再び休むことが多くて、今回のように自ら再び登校をするという事は珍しいかと思えます。その理由として、箱庭でよくなっていくときというのは、今回のように、連続的に箱庭制作をすることによって、葛藤を意識化し、さらに自分の気持ちを整理し治癒していくわけですが、たいていの場合は、今回で言えば、終戦レベルで終わってしまっって、再び、悪化して、また最初からということが多い中で、Aは、救出というさらに上のレベルの整理が出来たことがよかったんじゃないかなと思うかと思えます。そして、救出まで導いた原因の一つには、母親自身の葛藤の整理も考えられます。

この症例について考察させていただきますと反復性腹痛は、心理社会的要因や環境要因が関与することが多いのが現状です。そのため、結果としてその診断および治療が大変困難なことが多くなっています。反復性腹痛の心理治療



の一つとして箱庭療法があるわけですが、今回Aは砂に触れることによつて、退行が促され、攻撃、破壊、再構築などの表現を行い、自己表現治癒力を高めたと考えることが出来ます。

## 戦 い

今回提示させていただいたAの箱庭の作品には「戦い」というテーマが直接的に表現されていました。しかし、私の経験では今回のように直接的ではなくても、間接的に戦いを表現することは箱庭において珍しくありません。私はそれらを通して何かと戦う自分というものをよく見つめさせていただいております。そこで、箱庭に限らず、戦いについて考察してみたいと思います。

ニュースを見ておりますと、よくというか、私の勘違いかもしれませんが、イスラム教の国、とりわけ西アジアの国というのは、戦争を起こしているのかそれとも、ある大きな国の被害をこうむっているだけなのか、戦争にかかわることが多いような気がします。それで、イスラム教について、私が今現在知っていることは、まず、イスラム教はキリスト教、仏教とともに三大世界宗教のひとつということです。すなわち、それだけ世界に信者がたくさんいるということですから、それから、コーランという経典を持ち、「アッラーへの絶対的服従」、ということぐらいでしかありません。無学の私を知っているイスラム教は以上です。そして、イスラム教の国が多いアラビア地方というと、私のイメージに「メソポタミア文明」という古代の文明があるわけですが、そのメソポタミアで有名と言えばなんと言っても「ハンムラビ法典」という法律があります。その法律には有名な「目には目を、歯には歯を」という「復讐法」と言われるフレーズがあります。どうもイスラム教をよく知らない私は、地域が一緒と言うだけで時代がぜんぜん違うのに、イスラム教のイメージに勝手に組み込んでいます。それで、「目には目を、歯には歯を」と言うフレーズ

を単なるやられたらやり返せという、そういう意味に捉えているということもあって、イスラムの国々が、戦争にかかわることはイスラム教という宗教が原因であって、イスラム教に対してどうもいいイメージがありません。改めて言いますが私はイスラム教というものをまったく知りませんので、これ以上そのイスラム教と言う、宗教についてお話しするというのは、大変危ないことですので、これぐらいにしておきます。ところで、キリスト教の聖書では「あなたも聞いておるとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、私は言っておく。悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬を向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。」(マタイによる福音書五―三八―四〇)と言っていて、同じフレーズでもむしろ復讐するなどというわけです。さらに聖書ではこの後に、「汝の敵を愛せよ」とまで言っています。

ところで、戦争について仏教はどうなのか、という話に戻ります。

まず仏教が戦争についてどういつているかの前に、私たちは日本の仏教と名のるものが実際にどうしたのかということを知らなければならないと思うんです。

それで、お恥ずかしいといましようか、悲しいことにといいましようか、あの第二次世界大戦のときの仏教は戦争を反対するどころか賛成していた、という事実があります。それも賛成といっても仕方なく賛成していたんではなくて、その正反対で、賛成も賛成で、先頭きって協力していたと聞いております。もちろん、私を知る範囲ではどのお経にも戦争という言葉が直接的表現としてあるわけはありませんし、戦争反対ということを直接言っているわけではないように思います。しかし、一般的戦争というのは理屈や理由はどうであれ、必ず人が死ぬということがおこります。もちろんほっといても人間は死にますが、そういう死ではなくて、人が人を殺すという殺人ということを伴うわけがあります。日本は法治国家です。その日本の法律では殺人は罪として、裁かれます。理由はどうであれ、罪が重いか軽いかはあっても、まず裁かれなければなりません。しかし、一般的戦争においては、人を殺しても裁

かれるどこからか、逆に勲章までもらえてしまつてしまつてです。人を殺しても、病気を治す薬を見つけても同じ勲章がもらえます。話を元に戻して、戦争、そして人殺しということですが、仏教では、不殺生戒と言つて、生き物を殺してはいけないという戒があります。人間の頭で考える「人を殺してはいけない」よりももっと大きく「すべての生き物を殺してはいけない」ということでしょう。この不殺生戒は、五戒の一番最初の戒です。ということは、仏教の基本中の基本といえるんじゃないでしょうか。その基本を私は守りません。日々のちを頂いて生きております。ひよつとすると私は地獄に落ちるかもしれません。

生き物を殺してはいけないというこの不殺生戒よりも、もう少し、戦争に近い表現が実は涅槃経の中にあります。

その涅槃経のなかに「金剛身品」というところがありますが、そこに次のような話があります。今まさになくならうとしている仏の周りには、その別れを惜しんで多くの生き物から菩薩まで集まつてきています。そのなかの迦葉菩薩と仏の会話を藤秀環氏の「涅槃経を語る」を引用させていただきます。

「法は人有るも人無きも法である。しかし、人が無ければ法は現われない。法は人によつて興る。人がなければ法は衰滅する。人が大事だ、このことをわれわれ仏子は牢记すべきである。」

だから人々は「人」を護るべきである。人を護ることは「法」を護ることになる。法を護ることは「仏」を護ることである。こうして、仏と法と人とは別れ別れのものではない。仏・法・僧の三宝は一体である。僧とは染衣をつけ頭をまるめるだけが僧ではない。僧とは「人」である。この「人」を人々は護り、敬い、重んずべきである。「人」に危害を加うるものがあるならば、人々は生命をささげて守護せねばならないのである。

そこで、仏、迦葉に告げたまふ。「善男子、この因縁をもつて、比丘尼、優婆塞、優婆夷は応に勤めて正法を護持すべきである。護法の功德果報はまことに広大無量である。善男子、この故に護法の優婆塞等は、刀杖を執つて持法の比丘を擁護せねばならぬ。もし五戒を持つものであつても、ただそれだけならば大乘の人ということが出来ぬ。ひ

とり空閑のところに坐して法を樂しむものは大乘の徒ではない。大乘の法は七宝の宝池の漣の音の中にも響き、劍戟の閃く、阿修羅の世界にもかがやく。たとえ五戒を受けざるも正法を護るものは大乘の徒である。正法を護るものは、それゆえ、当に刀杖劍戟を執って持法の法師を護るべきである。」

「世尊、もろもろの比丘は、刀杖を手にする優婆塞と俱にいてもいいのでありますか。この比丘は持戒といふべきか、破戒の比丘となりませぬか。」

「破戒の人というてはならぬ。迦葉聞くがいい、われ涅槃の後に濁惡の世となり、国土荒乱し、互いに奪掠して、人民が飢饉に苦しむであろう。その時に飢饉を免れるために発心出家するものが多く現れる。このような人を禿人という。この禿人の輩が持戒清淨の比丘の正法を護持するものを見て、驅逐したり、殺したり、害したりする。この故に、われ今、持戒の人が刀杖を執る白衣(在家)の者を伴うことを聽す。また、もろもろの国王、大臣、長者、優婆塞等、護法のために刀杖を持つものを名づけて持戒とする。刀杖を執っても命を断つてはならぬ。」(藤秀璋「涅槃經を語る上」一一五から一二六頁)

少し私なりに以上を解釈しますと、まず、仏が迦葉菩薩に言われます。

正法すなわち真実の法を護持するべきです。護法、すなわち法を護ることの功德果報は廣大無量です。だから、護法、法を護る人は、他の護法、法を護る人を守らなければならないのです。五戒すなわち仏教の基本的決まりごとを守るものであつても、ただそれだけであれば、大乘の人とは言えません。大乘の法は、すなわち、正法というのは、七宝の宝池の漣の音の中にも響き、そして、その上に劍戟の閃く、阿修羅の世界、そういうところにも正法は輝くと言われるのです。さらに続けて、たとえ、仏教において、基本中の基本である、五戒を守らなくても、この正法、真実の法を守るものが、大乘の人です。だから、刀を取つても、正法を守る人を守らなければならない、とこんなことを仏は言われます。

そこで、迦葉菩薩は、びっくりされまして聞くわけです。そんな。刀を取って、戦うと言うことは、人を殺すこととなり、五戒の不殺生戒を破ること、すなわち、破戒になりませんか、と聞くんです。そして、仏は、どう、お答えになったかと言いますと、そういう人を、すなわち、法を守るために、刀を持つ人のことを、破戒の人といってはいけません。迦葉よ。この私が死んだ後は、この世の中は濁悪の世となり、国土荒乱し、互いに略奪し、人民が飢餓に苦しむでしょう。そういう時代、どうしようもない時代になると、そういう飢餓、苦しみから免れるために、発心出家するものが現れます。仏は、そういう発心出家する人のことを、禿人であると言われます。さらに、この禿人が正法を守る人を、駆逐したり、殺したり、害したりする、と言われます。だから、正法を守る人は、刀を持つ在家の人をお供にすることを許します。こういう、正法を守るための刀を持つことは、持戒といって、すなわち、この場合は破戒ではないと言われます。しかし、この場面の、仏の最後の一言は、刀はとつても、命はとつてはいけない、といわれます。

刀を持つても、振ることがなければ、何の意味もない、と私の持ち合わせている、品陳な、常識は考えます。しかし、歴史を振り返るとガンディーのアヒンサー（汝殺すなかれ）が思い出されます。西暦一九〇〇年前後に、インドでサティヤーグラハ、すなわち、非暴力・不服従の運動で、インドを開放しようとした人だったかと思うのですが、私はこれこそが、仏が迦葉菩薩に言おうとしたことだと思えます。すなわち刀は持つが、殺さないと言うことは。もし、刀を持たないと言うことであれば、それは戦うことすらしない、すなわち、一番卑怯なやり方で、現実から逃げるということでしょう。それじゃあ、いけない。やつぱり、正しくないことは、戦わなければならない。しかし、自分自身について考えると、すぐ言い訳ばかりして、戦いはいけないと口先だけで唱え、ただ逃げているというのが現実だと思えます。

それから最後の仏の言葉の中に、どうしようもない時代になると、そういう飢餓、苦しみから免れるために、発心

出家するものが現れ、そういう発心出家する人のことを、禿人であると言われていきます。さらに、この禿人が正法を守る人を、駆逐したり、殺したり、害したりする、と言われたところなんです。この「禿人」とは、字から言えば、禿の人ということで、普通、禿の人と言え、どういう人のことを想像するかといえ、僧侶でしょう。すなわち、そういうひどい時代には、僧侶が現れて、正法、真実の法を駄目になると、仏は言い切られているかと思えます。

これに似たことに、蓮如上人も、「坊主と云う者は、大罪人なり。」といわれています。普通、私のイメージで、僧侶、というのは、道徳的で、世の中の模範となる、立派なイメージがあります。もちろん、この私のイメージはそうではありません。いわゆる、テレビによく出てくる、山にこもった、偉い僧侶はいつも、すばらしいことを、おっしゃる、あの人を見て、仏法をおろそかにする、大悪人に見えませんか。

日本の歴史、特に仏教の歴史でも重要なひとである、伝教大師最澄は、「愚中の極愚、狂中の極狂、塵禿の有情、低下の最澄」とご自分のことを言われ、また、親鸞聖人も「愚禿親鸞」と、ご自分で名のことによって、厳しい自己批判をされているのですが、お二人とも、この仏のこの厳しい言葉、すなわち、僧侶こそがどうしようもない、世の中をだめにする、この言葉をご自分のこととして、受け取られ、そう言われたんだと思うんです。

藤秀璋氏は「禿人の自覚をもち、みずから恥じ、みずから鞭うつものは、もはや単なる禿人ではない。かれらは正法の人である。正法を愛し、正法に生き、正法を護る人である。禿人であって、禿人というものが外にあるように思うものは、本当の禿人である。これらの禿人こそ頭をまるめ、染衣を纏いつつ、正法を毀るものである。これらの禿人は正法を護持するものあるを見て、駆逐し、殺し、害する。そこに護法の刀杖が光って来なければならぬ。この刀杖は殺人剣でなくして活人剣である。降魔の剣である。仏法守護の四天王が各々剣をもち、不動明王が羅索をもつのはこの故である。法を持ち、法を護り、法をして久住せしむるものは「僧」である。白衣の人といえども僧である。染衣の人でも法を破るものは僧ではない。「僧」のあるところに「法」は生きる。法の生きるところに「仏」は永久

に生きてまします。仏・法・僧の三宝は、三宝とはいうけれども三宝一体である。」(藤秀璋「涅槃経を語る上」一一七―一八頁)と言われておりました。厳しい言葉です。私なんか、もう、びったりこういう人間です。常に、自分が正しく、周りが間違っていると、こう思つて、生きている人間です。少し自分の愚かさに気がついてみても、その愚かさに気がついたことに優越感を感じているどうしようもない人間です。

また、この「涅槃経」の「金剛品」に迦葉菩薩が仏のこの説法を聞いて「世尊あなたのおっしゃるとおりであります。仏法、如来は不可思議であります。私はこれからも仏法、如来についてよく学び、みんなのためにその教えを広めてまいります。」と言つたところ、仏は迦葉菩薩に「善いかな、善いかな、如来の身は金剛不可壊身である。菩薩、かくのごとく正しく見、正しく知るならば、如来の金剛の身を見ること、鏡中にもろもろの色像を見るがごとくである。」とほめられたという話があるんですが、これを聞きましたとき、よく私自身が言うことなんです。現代の世界の中はなんか大変な地獄のような世界だとか、もつと身近に言えば、不景気で暮らしにくいと言つて生きているんですが、これを知りましたとき、結局、周りが地獄に見えるのも自分そのものが、地獄・餓鬼・畜生の世界を作り出しておるわけで、それを鏡で見てただけではなかるうかと、知らされたわけです。よく自分の子供が、自分の思い通りにならないことを経験されるかと思ふんですが、思い通りにならないどころか、正反対のことをすることがあつて、いらいらしたことがあるかと思ふ。子供に限らず、他人でもいいんですが、それつてやっぱりそれは自分の姿でしかないんだと、仏はおっしゃっているようで、ただただお恥ずかしい限りなわけです。

ところで、キリスト教の聖書に次のようなところがあるのですが、それは「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かつて、「あなたの目からおが屑を取らせてください」と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ。まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」(マタイによる福音書七―

三(一五)と。どうでしょうか。どちらも昔からある宗教でありますから、よく似たことを言っているところがたくさんあるんですが、ここもそのひとつではなからうかと思うんです。どうでしょうか。そうは思われませんか。それだね、ともにいえることなんですが、われわれ人間は自分の愚かさに、なかなかというか、ぜんぜん気がつくことができない。しかし本当に気がついたとき、周りが見え、自分のこの住む世界が浄土になるんだと言えるんじゃないでしょうか。自分の愚かさに気がついたとき、そしてその愚かさを素直に名告れたとき、みんなと分り合うことができるんだと、そして、親鸞聖人にとつてのそれが、「愚禿親鸞」という名告りとなり、だからこそ、聖人が亡くなつてもおおよそ七五〇年になつてもなお私たちの生活になくはならないものとして、いまだ生き続ける真宗たる所以のひとつだと思えます。

ところで、イエス・キリストとはキリスト教信者にとつての神様みたいに思われていることが多いかと思えます。確かに神様だとは思いますが、いわゆる日本の神様とは違うと思えます。聖書の中でイエス・キリスト自身は自分のことを「人間」であると言っています。私が思いますに、この人間であるというイエスの意味するところは、「私もあなたたち(イエスはみんなに理解されず迫害されるわけですが、そういう迫害するものにむかつて)あなたたちと同じおろかな人間です」という宣言じやなからうかと思うんです。日本の神さんは自分がおろかだなんて宣言はないかと思えます。私自身、真宗と聖書についてはいくらか勉強させてもらっているわけですが、日本の神さんについては勉強不足ですから、あれやこれや言うのは失礼なので、このことはこのぐらいにしておきますが、でもね、いまどきの宗教、いわゆる新興宗教がどうか分かりませんが、宗教を信じるというとき、そこには、自分の罪深さ、愚かさの自覚が必要ではないかと思うんです。それは、信者だけではなく、その宗教を起こすものという意味でも必要だと思えます。そういう意味でいまどきの宗教はどうなのかと思うのですが、オウム、麻原さんや、白装束の千乃さんといった方々はどうなんでしょうか。



ところで、私が勉強させていただいていくうちに、キリスト教と浄土真宗は似ているように感じています。そして、うそかまことか、親鸞聖人は聖書を読んだことがあるという説もあるようです。日本にキリスト教が伝わったのは中学校の歴史で習ったかと思いますが、フランシスコ・ザビエルが西暦一五〇〇年代に伝えたことになってますから、教科書的にはありえない話です。そして、親鸞聖人が生きられていたのは西暦一二〇〇年ごろです。しかし、親鸞聖人が勉強したものは何かと考えたとき、仏教です。その仏教というのは日本独自のものではありません。中国朝鮮から伝わったものとして、その中国にはすでにキリスト教は当時伝わっていたことになっております。それも「唐」の時代といえますから、西暦八〇〇年ごろ。すなわち、日本では平安時代に当たるわけです。ですから、人によって直接伝わることはなくても、本や思想としては伝わってきていても少しもおかしくないと思います。

## 好 機

さて、では「自らの気づき」とは、何に、どうしたら気づくのでしょうか。先ほど「自らの気づき」を別の言葉で、自分探し、自己理解、他者理解、そして生き方がしとも言いました。私達は言葉では簡単にこのようなことを口にしますが、ただ奇麗事に終わらせている現実のように感じているのは私だけでしょうか。最近の凶悪犯罪のニュースを見ていると、人は簡単に「命の大切さ」を口にしますが、それを言っている人のことを、偽善者の戯言のように感じています。

ところで、「自らの気づき」という問いは、どういう形で經典で言われているかといえ、まず、無量寿経では法蔵菩薩が嘆仏偈を説きおわり仏に言われます。「唯然り。世尊、我無上正覚の心を発せり。願わくは、仏、我がために広く経法を宣べたまえ。我当に修行して仏国を撰取し、清浄に無量の妙土を莊嚴すべし。我世において速やかに正

覺を成らしめて、もろもろの生死・勤苦の本を抜かしめん。」すると、私は法蔵菩薩に、「修行せんところのごとく、莊嚴の仏土、汝自ら当に知るべし。」と言いつちられています。法蔵菩薩は「この義弘深にして我が境界にあらず。」と言われ、さらに教えを求めますと、大海の話をされた後、法蔵菩薩が四十八願を説かれています。四十八願は大変有名で大事な願であるわけですが、四十八願を法蔵菩薩が説かれる前の私の一言に「これ時なり」と言いつちられています。

また、観無量寿經では韋提希が仏に自分の身を省みずに「世尊、我宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる。」と訴えたところ、何もいわずにただ光をしめしたところ、その韋提希が「唯、願わくは世尊、我に思惟を教えたまえ、我に正受を教えたまえ。」と願われたのです。すると、私は「微笑」されたということでもあります。

そこで思われるのが、教興の因縁と諸教の大悲を表す教行信証総序の「しかればすなわち、淨邦縁熟して、調達、閻世をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。これすなわち権化の仁、齊しく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を惠まんと欲す。」です。淨邦縁熟してということとは、まさに、「これ時なり」、私の「微笑」の時ということで、キリスト教の聖書で言えば「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコによる福音書一一五)という、連続の時が一点に集中し、満ちてくる真実の世界が思われるのです。そして、その時にむかえられた者は、法蔵菩薩、韋提希といった苦惱するものがあります。その苦惱する者は、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。」(真宗聖典二二九―三〇頁)と、まさに、自分の力では生きることが死ぬこともできなくなつたものであります。

「自らの気づき」そのものはどういうものかという前に、私にその時が満ちていることを知ることが、中野良俊氏が「深層意識の解明」で述べられている「迷いの心が何処かへ行って、そして悟るのではない。迷つた心が悟るのである。」迷っている自分に気づくという「自らの気づき」の一つです。その時が来たとき、ただ来たからといって、

それで終わりではありません。その内容の一つに「身」ということが欠かせないと思うしだいです。

## 身

身(み、しん)について私が学ばせていただいたことの一つに、聖徳太子の身があります。それは、捨身、捨命、捨財の三捨の中の捨身の身です。三捨というのは聖徳太子の三経ともいわれている「勝鬘経」、「維摩経」、「法華経」の中の勝鬘経の中で、勝鬘が仏陀の教えに帰依する意思を十の誓願という形で表明する十大受とともに有名です。その聖徳太子の捨身を袁輪秀邦氏は次のように述べられています。

「また、『勝鬘経』第四撰受正法章は、仏陀の正しい教えを實踐するために人間はどうすることが大切なのかという問題について説かれた章である。聖徳太子はこの章を經典中のもっとも大切な章として、自著『勝鬘経義疏』全体の約半分をさいて詳細な解釈を行っている。この章のはじめに、「正法を撰受せんがために三種の分を捨つ。何等をか三と為す。謂わく、身・命・財なり。(現代語訳：仏陀の正しい教えを實踐するためには、自分が持っている三種の分限を捨てなければならない。何を三とするのかというと、身と命と財である)」という有名なことばがある。仏陀の正しい教えを實踐するとは、自分の身と命と財を捨てることであるというのである。この仏陀のことばについて、聖徳太子は次のように解釈している。」(現代語訳のみ記す)

「これまでの解釈は、『捨身(身を捨てる)』ということとは、自分から身体を投げ出して、他の人の僕となることであり、『捨命(命を捨てる)』ということとは他の人のために死ぬことであると言われてきた。しかし今(私の)解釈では、『捨身』と『捨命』とはいずれも死ぬことである。ただ、決意の仕方が両者は異なっている。身体を飢えた虎に投げ与えるような決意は『捨身』であり、忠義の士が自国の危機を見て生命をささげるような決意は『捨命』である。

「捨財」とは、身体と生命以外のものを捨てることである」

この文で注目されるのは、「勝鬘經」の教説で最も重要なこの三捨(捨身・捨命・捨財)の教えの中の「捨身」の意味について、一般には「他の人の僕となること」と解釈されているが、聖徳太子は捨身も捨命もどちらも「死ぬことである」と断定し、捨身とは「身体を飢えた虎に投げ与えるような」決意をもって死ぬことであると述べている点である。

「身体を飢えた虎に投げ与えるような」という譬えは、仏陀釈尊の生涯を説く物語(本生譚)に登場する薩埵太子(薩埵王子)の話として有名である。薩埵太子とは、仏陀になる前(さとりを得る前)のゴータマ・シッタールタと呼ばれていた青年時代の名である。その薩埵太子が、ある日竹林を彷徨していると、崖下から飢えた虎の子の泣き声が聞こえてくる。覗き込むと、七匹の飢えた虎の子が親虎の乳を飲むようにしているのだが、親もやせ衰えていて乳をだすことができない。飢えた子虎たちは狂ったように泣いている。それを見た太子は「われ今、身を捨てるの時至る」と言つて、着物を脱ぎ捨て、崖下に身を投げて虎の餌食となった、という物語である。捨身飼虎譚と呼ばれるこの物語は、仏陀とはそのような捨身の心をもって出生した人であるという一種の譬喩物語として民間に伝えられてきたもので、「今光明經」をはじめ幾つかの經典で説かれている。また、中国龍門石窟をはじめ幾つかの石窟には、この物語が壁画(「捨身飼虎図」として描かれており、いまでも人々に親しまれている。

このように見てくると、聖徳太子の「勝鬘經義疏」における「捨身」の解釈は、捨身飼虎譚にもとづいたものであることがわかる。しかし、聖徳太子は「捨身」ということの意味をそのような教説にもとづいて単に解釈したのではない。彼は「捨身」という教えをもって政治を實踐しようとしたのである。そこから感じられるのは、聖徳太子が、飢えた虎に身を投げ出した薩埵太子のように、死ぬことを覚悟のうえで民衆のために身を捧げていった、その毅然としたすがたである。(袁輪秀邦著「聖徳太子と親鸞に学ぶ人間学」二七頁)

以上から聖徳太子の身について考えるとき、さらに当時の時代背景を少し見ておくことも必要だと考えられます。聖徳太子が生きていたと言われている六世紀頃(五七四年から六二二年)は大変荒れた時代と言われ、天皇家の歴史で唯一暗殺された天皇といわれている崇峻天皇の次が推古天皇であり、その推古天皇の摂政が聖徳太子であったことだけでも想像に難しくないが、その天皇家の争いに、蘇我・物部家が関わり、その両家は当時百濟から伝来した仏教についても、蘇我一族は仏教受け入れを積極的に支持し、物部一族は天皇が天下に王としてあり、天地に満つる百八十神(ももあまりやそかみ)を春夏秋冬祭祀祈る司祭者でもあるから、その司祭者が西蕃(にしのとなりのくに)の神(蕃神(あたしくにのかみ))である仏を祭れば、必ず国神の怒りをまねくとして反対し、動乱の時代でした。その時代に聖徳太子は仏教を選ばれました。そしてその聖徳太子が選ばれた仏教は個人的信仰にとどまらず、日本という国の政治の中にかかされていたことは、憲法十七条を見ても明らかです。その憲法十七条の第一条は有名な「一に曰く、和なるを以て貴しと為し、忤ふること無きを宗とせよ。人皆党有り、亦違る者少なし。是を以て或いは君父に順はず、乍隣りに違ふ。然れども、上和らぎ下睦びて、事を論ふに諸ふときは、事理自づから通ふ。何事か成らざらむ。」とありますが、中村元氏は次のように述べられています。

「諸国において和の思想が特に強調されるようになったのは、やはり人類の社会的生活の発展におけるある段階においてであり、それはつまり普遍的な国家の擁立を目指す帝王が、いろいろな部族を統一したときに強調したことである。」と前置きした後、「和の觀念が、儒教から受けたものであるという解釈もなされており、『論語』に「和するを貴しと為す」という句がある。ただ『論語』のその箇所では、主題が礼であり、和ではない。ところが聖徳太子の場合には、人間の行動の原理として和を唱えている。つまり太子が、礼とは無関係に、真つ先に和を原理として掲げている。これは実は、仏教の慈悲の立場の実践的展開をあらわしているものだといえる」(中村元著『聖徳太子―地球志向的視点から』一二二頁―一二三頁)というように、聖徳太子は仏教で日本を建て直そうとされていきました。その聖徳

太子が身について捨身を通して当時の常識を覆す解釈をされたということです。他人の僕となることを捨身とするのではなくて、「身体を飢えた虎に投げ与えるような」、「われ今、身を捨てるの時至る」という捨身の身です。しかしここだけで終わると、聖徳太子の身は到底私たちには真似できない、理想主義の身で終わってしまうわけですが、憲法十七条には続きがあります。社会の教科書的には第一条で終わりですが、真宗はここで終わっては不完全です。その不完全を補うどころか、主とも言っても言いすぎでないのが、第十条です。「十に曰く、忿を絶ち瞋を棄てて、人の違ふことを怒らざれ。人皆心有り。心各執れること有り。彼是すれば我は非す。我是すれば彼は非す。我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是凡夫ならくのみ。是く非き理、詎か能く定むべけむ。相共に賢く愚かなること、銀の端无きが如し。是を以て、彼人瞋ると雖も、還りて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。」この第十条を養輪秀邦氏は次のように述べられています。「人皆心有り。心おのおの執るところあり(人にはだれでも心がある、その心はそれぞれ自己に執着(固執)する性質をもっている)」と述べられている。自己に執着することを仏教では「我執」と言う。この我執が、自と他を分裂させ、対立を生み出す原因なのだ。

だから、第十条は続いて述べる。「彼是なるときはすなわち我非なり。我是なるときはすなわち彼非なり。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。ともにこれ凡夫のみ(彼がよいと言うと私はよくないと言い、私がよいと言うと彼はよくない言う。私が必ずしも何でもわかつている聖人みたいな人間であるわけではないし、彼が必ずしも何も知らない愚か者であるわけではない。ともに凡夫なのだ)」と。

凡夫とは、欲望に束縛されて本当のことが見えていない者のことである。欲望の根っ子には、我執がある。つまり人間はみな自己本位で、自分がいちばん大切だという本能があるから、その自分を捨ててまで他人の立場に立つことができないのだ。そういう意味、蘇我馬子も聖徳太子自身も「ともに凡夫」だと言い切っている。(養輪秀邦著「聖徳太子と親鸞に学ぶ人間学」三九頁)

これがあるからこそ、聖徳太子の捨身が理想主義の身から現実を生ききる身と成っていると思っております。亀井勝一郎氏は第十条を「太子の人間研究の結語ともいうべき、意味深い箇条である。」(亀井勝一郎宗教選集1「上代思想の悲劇―聖徳太子―一四七頁)と言いつちられてもおります。究極の人間こそが仏になる道を歩むこととなる、そういう身を聖徳太子は生ききられたのでしょうか。

そして、親鸞聖人の身について考えるとき、どうしても踏まえておかなければいけない身は、善導の身であると思えます。それは、歎異抄で次のようにいわれております。「聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」ということから、まず、善導の身は出離の縁あることなき身、という自己への目覚めである機の深信です。出離と言っても、何から出離するかといえば、生死から、即ち出離生死がないということです。煩惱を吹き消すことのできない、そういう身です。その身を親鸞聖人はそくばくの業をもちける身と言いつちられております。そくばくの業とは宿業でしょう。その宿業を安田理深氏は「人間の思いはあらゆるものがみんな思いだった。あれもこれも思つとつたけれど、思いが追いつめられて来て、もうにっちもさっちも思いがどうにもならない所へやつて来て、思いが思い知らされる。思いが思いだと知らされて、はじめて思いでないものに触れるんです。それが宿業でしょう。思いでないものに触れるのは宿業です。思いでないということが、宿業の根源的意味なんです。」と表現されています。私の思いを超えたところで、弥陀の私を助けようとしてくださる本願に出会うのです。私が生きていることも死ぬこともできなくなつたとき、出会うのが私の身であります。しかし、その身、宿業は運命というようなものではありません。なぜなら親鸞聖人は御自身の身を「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と、真正面から言い切ら

れておるからです。

## 阿 弥 陀

ではそんな私を助けると言い切られる阿弥陀について考えていきたいと思えます。そこで、参考として、蓑輪秀邦氏編の「解説浄土論註改訂版」の脚注では、「*amita* 阿は否定の接頭辞、弥陀は「量られた(もの)」の意。*amita* といった場合、*amitayus* (はかりなきいのち、無量寿)、*amitaha* (はかりなきひかり、無量光) の二つの意味がある。」とあります。まず、阿についてですが、*a* といえば、中学校の英語の授業でも最初の方に学ぶところでは、一つのという意味でしょう。そして、阿弥陀の *a* のように否定の意味として考えるとき、否定というところは、無ということと零ということでしょう。この否定の *a* の一つに *apnea* というものがあります。意味は呼吸停止です。*Prea* は呼吸で、一つの呼吸ということは呼吸は一つであっては止まってしまいます。しかし、一つである以上はく息ははき続けられているということでは止まってはいません。止まっていないうことは、無限に続くということでもありません。すなわち「*110118* となるとところに、阿弥陀の五劫思惟願いは「親鸞一人がためなりけり」と言っても、一人ではない、無限の中の一人であって、でも真の一人だからこそ無限へと続くのです。しかし、こういうと何か奇麗事作り話で終わるところに、やはり零だと思えます。零は何もないということですが、何もないのではありません。零には無限があるのです。

この「*110118*」について、死ぬということから今一度考えてみたいと思えます。死ぬということは、普通考えるのが、呼吸が止まる、心臓が止まる、体が冷たくなることでしょう。最近では脳死ということが言われるわけですが、今回はそのことについてはあまり触れずに、死について一般的には終わることをイメージすることが多いかと思いま



す。死んだら終わりと、言い聞かせるように、死を否定したところに生きることの肯定性を見出して生きています。それは、竜樹は凡夫には五怖畏があるといっていた、その五怖畏のなかの死畏によって、死をタブーとして、見ないことよって、誤魔化して生きています。ではなぜ、人間は死ぬのでしょうか。その答えのヒントは聖書に書かれております。

旧約聖書、最初の「創世記」で、神は「天地の創造」を、まず最初にされました。その中で、「エデンの園」というところが、作られたそうです。そこでは、男と女はお互い同士、また自然とも調和して暮らしていたのだそうです。ですから、男と女はけんかするなんてことはありません。そして、環境破壊なんてことも起こりません。いってみれば、天国みたいなところでしょうか。そこは、平和の楽園ですから、働く必要もないし、選択も、自由も、思考もない、そういうところなんだそうです。そこに暮らしていたのは、「アダム」と「エヴァ」ですが、ところで、エヴァというのは「命」という意味です。話が少しそれましたが、彼らに神は、ひとつだけしてはならないこと、禁止していたことがあります。それは、エデンの園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけないし、触れてもいけないというものでした。実は、この木の実こそが「善悪の知恵の木」の象徴だったのです。すなわち、善悪の知恵の木の実は食べてはいけないと神から言われていたんですが、アダムとエヴァは理由はどうであれ、理由はどうであれと言うのは、二人が食べたのは、蛇にそのかされて食べたんですが、別に蛇にそのかされたからどうとか言うのではなくて、結局二人は、神の命令に背いてしまったのです。神の命令に従うことよって、二人は、自然を超越することなく、自然の一部となり、調和が取れていたものが、その平和な世界が破壊されることとなったのです。しかし、今までは、自分で考える必要もなく、何もしなくてもいい世界だったわけですが、それに比べて、その後の人間は、自分たちで善悪を考えて生きることとなり、そのことよって、常に自分で考えて、何かしら行動を起こして生きていくこととなったことは、人間の立場からは、これこそが人間の自由のはじまりなのです。これについて、

エーリツヒ・フロム氏は「自由からの逃走」の中で、「神の命令に反逆することは、強制から自己を開放し、非人間的生命的無意識的な存在から、人間の水準へとぬけだすことである。權威の命令に反抗し罪を犯すことは、積極的な人間の立場からいえば、自由の最初の行為であり、最初の人間的な行為である。」（四三頁）といわれています。私は、これこそ「からの自由」と「への自由」ということだと思えます。ここまで聞きますと、アダムとエヴァは私たちにとって実にすばらしいことをしてくれたんじゃないかと思うんです。そもそも、神の究極のおきてを破ったことは、「罪」ですから、二人はその罪を償うこととなったのです。例えば、二人は、以前から裸で生活をしていたんですが、それについてなんとも思っていなかったのに、それ以後、急にそれが恥ずかしくなるのです。それから、エヴァには、子供を生むのに大変な苦しみを持つこととなったのです。すなわち、陣痛というものが始まったのです。また、アダムには、自分で食べ物を得るために、一生働かなければならなくなったのです。そして、実は一番重い償いがまだありました。

実は、どうして、神は二人にあのエデンの園の中央の木の実は食べてはいけないということをし、言ったのかと申しますと、そのことについて、聖書の中の、エヴァと蛇の会話を紹介することとしましょう。

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

女は蛇に答えた。

「私たちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

「食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」と、すなわち、この実を食べた二人、人間は死ぬという運命、「罪」を背負うこととなったのです。

そうになると、アダムとエヴァはとんでもないことをしてくれました。二人が木の実を食べさえしなければ、人間は死ななくてよかったのに。すなわち、癌とか死ぬ病気もなかったはずです。医者もいらぬいい世界になったかも知れません。みんな、アダムとエヴァのせいで死ぬことになったのです。人間はなぜ死ぬのか、という問いは、答えは簡単です。アダムとエヴァが禁断の果実を食べたからなのです。

でも、逆に考えたら、死ぬことがなかったら、退屈です。何もすることがないんですから。そうになると、何で生きているの、ということになるでしょう。生きてる必要はなくなりません。

そうすると、アダムとエヴァが食べたことよって、人間は死ぬことになったことよって、生きる意味が生まれたんじやないかと思うんです。死ぬるおかげ、と言えるんじゃないかと思うんです。法律ではそのときそのときで、便宜的に自由を決めますが、それで私たちは決して自由になることはありません。本当の自由を獲得するということは、死を自覚するからこそ、今を一生懸命生きようとする、そういうことからしか生まれてこないんだと思うんです。私の知る限りでは、仏教、とりわけ真宗では自由ということは言われておりません。そのかわり、「自在」ということが言われているのです。自在といえは、自らが在ることよして、自らがこの世にあるということをはっきり意識したとき、自在となるんじゃないかと思うんです。先ほどお話しした、エーリッヒ・フロム氏は、同じ本の中で、「汝みずからを知れ」という言葉は、人間の強さと幸福をめざす根本的な命令の一つである。」と言われています。

フロムが真宗を知っていたかどうかは、知りませんが、時代や人種が違ってもここに真実があると思うんです。

そして、死という一般的○が一として自覚されたとき、無限大となるということが、死ぬということタブーにしては見えてこないのでしょうか。

## 客観的死

ところで、細胞レベル、組織レベルでの死もまた、「110118」を証明するものと考えます。というのは、細胞が死ぬということに、壊死というものがあります。これを necrosis (ネクローシス) といいます。その原因は細胞内部の環境を外部と隔離している細胞膜の透過性が失われることによるのですが、ではなぜそういうことが起きるかといえば、小川勝洋氏がそれは「細胞にとっては自己」による「不慮の死」(小川勝洋「アポトーシスの謎」六頁)と表現するように、心筋梗塞や癌などに起こる炎症です。そして、別の細胞の死に apoptosis (アポトーシス) というものがあります。アポトーシスとは一般的に「プログラム細胞死・細胞の自殺」といわれていることから、細胞の正常発生活程で、一定時期に一定の場所で見られるものです。細胞が生まれて、分裂成長し、そして、死ぬということが遺伝子にきっちりと組み込まれているのです。これがないと、細胞は永遠に分裂し続け、新たな細胞が発生することもなく、代謝も維持できません。また、癌というものを定義するときに、細かいレベルでは、肺がんや胃癌、大腸癌と別々ですが、癌の大きな枠組みとして、自律性に増殖するということがあります。すなわち、アポトーシスが十分に働かず、好き勝手に細胞が増え、しかし、増え続けてもスペース的にも、栄養的にも限界があり、結局、正常なところを巻き込んでネクローシスしてしまい、大本の人間の生命が維持できなくなり、死んでしまうことになるのです。細胞だってちゃんと死ななければならぬし、死ななきゃ生きることができないのです。死ぬから生きれるのです。

そして、「110118」によって、阿弥陀の命、願いは生きることになるのです。死をタブーとして奇麗事にしても何も生きないのです。

## 神頼み

『涅槃経』の中に阿闍世王と耆婆大臣の会話がありました。その一部にこういふのがあります。まず、耆婆が阿闍世に言います。「如来は、仏教の中で、どうしようもないと言われていて、すなわち救いようのない人、一闍提のために、法、すなわち、仏法を説かれます。如来は常に病人に対して法薬を処方されます。一闍提と言われる、どうしようもない人もいつかは救われると、今すぐには効果がなくとも、きつといつかは救われるとして、一闍提に法を説かれます。たとえば、かわや、昔の便所がありますが、そのかわやに落ちるものを見たら、自らの髪の毛をたらし、それにつかまらせて助けようとするように、如来は衆生が三悪道すなわち、地獄、餓鬼、畜生に墮ちようとも、方便をめぐらして、救済してください。それゆえに、如来は一闍提のために法を説くのです。」と言うのです。それを聞いて、心動かされた阿闍世は耆婆に言います。「耆婆よ、私は「吉日良辰」を選んで、仏のところへ行こう。」と言うと、耆婆は、「大王、如来の法の中には吉日良辰を選ぶと言うことはありません。梅檀(香木の名)の林も伊蘭(悪臭四十里におよぶという悪木)の林も焼けるすがたには変わりはありません。「吉日凶日」もいっしょです。仏のところにもいれば、どんな罪も消えます。それが、吉日です。大王、お願いですから、今すぐ、如来のところへ行ってください。」と、こういう会話です。

この会話の中の、「如来法中 無有選択 吉日良辰」(聖典 七六九頁)、すなわち、如来の法の中には吉日良辰を選ぶと言うことはありません、と聞いて、あれっと思いませんか。たしかに、浄土真宗では、吉日良辰と言うことは気にしません。それは、皆さんご存知ですね。親鸞聖人も和讃で、

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつつ

卜占祭祀つとめとす

(聖典 五〇九頁)

と、おっしゃられています。しかし、これは浄土真宗だけのものではなく、本来仏教では吉日良辰なんか、ないんだと言っています。「般舟教」というお経でも、同じことは言われています。仏教にはそんなことないはずなのに、吉日良辰を選ばれるのでしょうか。それって、仏教を信じていないと言っていることと同じことです。仏教を信じていないと言っていることは、いつてみれば、仏教を誹っているんですよ。すなわち、正法を誹謗しているんです。正法を誹謗するものはどうなるかといえば、実は、これ、仏教では一番罪が重くて、救われません。仏教で罪が一番重いということは、人殺しよりも罪が重いんです。それなのに、あるお寺では、そういうことを選んで、おまけに、お守りなるものまで売っています。お守りって、いわゆる、「靈感商法」で高い壺を売りつけるのと、どこが違うのでしょうか。私は頭が悪いもので、さっぱりそのことが分かりません。五〇〇円のお守りと、一〇〇万円の壺の違い。お金がまったくない人にとっての五〇〇円と、お金を一〇〇〇万円持っている人の一〇〇万円、どっちがどうなのでしょう。どちらに、その五〇〇円なり、一〇〇万円を払わせることが、詐欺になるのか、私の頭では分かりません。

私には人間が考える理屈は分かりませんが、自然の理屈はなんとなく分かります。人間の理屈常識が死をタブーにします。死をタブーにしたとき何かにすることが必要です。それが、さらに私達の視界を遮ることになります。まさに無明です。真実の死は「〇〇〇」より、願いとなって、力となります。なるというか、なるということではなく、そのものです。

## 教

最近の青少年のニュースを受けてよく議論されることに、教育、学校が悪いということがあります。命の大切さを学校で教えていないというのが大方の意見です。しかし本当にそれが原因なのでしょうか。昔の授業に命の授業というものがあったのでしょうか。そんな教育、授業を学校で受けたと言う人は昔もほとんどいないはずですよ。

極端なことを言って申し訳ないのですが、学校で習ったことをきっちり覚えていてる人が一人でもいるのでしょうか。

命の大切さを学校で昔教えていたということはないかと思えます。むしろ今のほうが授業で教えようと努力している立派な先生はいらっしゃいます。一つ目の問題はそこだと思えます。とりあえず、こどもに問題が起ると学校のせいにする大人。そういう大人こそが、子供に人殺しを教えている、加害者です。それも無責任な加害者です。

もう一つの問題は、昔よりがんばっているのちの大切さを教えようとしている今の先生です。その先生が悪いということ少し乱暴な言い方ですが、しかし問題です。なぜなら命を教えることは、上下関係では絶対教えるとはいけないことだと思えます。命は教えるものではなくて、一緒に考えるものです。なぜなら教える側のものが、命とは何かという答えを持っていないからです。そんな態度で命を語るとき、そこには偽善者しか生まれません。そして、偽善者は平気な顔で殺人を犯します。

ではどうすればいいのか、と考えたとき、テレビである有名な人がこういうことを言うんです。それは道徳教育を復活することだというんです。私は教育の専門家ではないのでよくは知りませんが、その有名人が言うには、道徳を通して、日本という国家、国旗についての教育が必要だというんです。私は国旗とか国家とかいったことはよく分か

りませんが、じゃあ、あの太平洋戦争のころ、日本でも国旗とか国家とかそういう教育はなされていたと思うんですが、人殺しを堂々と呼ぶ戦争中、命の大切さが教育されていたのでしょうか。私はそんなことはないと思います。むしろ逆だと思っんです。それに、ニーチェの言葉に「道徳とは個人における畜群本能である」ということにしても、道徳・常識は闇です。

いのちは「〇〇」です。すなわち、道徳、常識ではわかりません。ですから、命とはどういうものかをよく知らない自分であるということをお人がまず自覚し、まず自分が学ぶことだと思っんです。自分がよく知りもしないことを教えることは不可能です。不可能どころかそれは、逆効果です。

二四〇〇年ほど昔のギリシャ文化で有名なプラトンは「徳は教えられるか」という問いに対し、「徳とは、生まれつきのものでもなければ、教えられることのできるものでもなく、むしろ、徳のそなわるような人々がいるとすれば、それは知性とは無関係に、神の恵みによつてそなわるものだということになるだろう」（『メノン』岩波文庫一一七頁）と言い切られています。すなわち、「命」のようなものを教えるということは、人間の考えるものさし、すなわち理屈では教えられない。それは神の恵みによつてそなわるものだと。ここで私たち真宗門徒は、この神を「阿弥陀」に言い換えて、そして恵みを「慈悲」に読み替えてもいいのじゃないでしょうか。そして、徳を命の大切さとして、改めて読み直しますと、「命の大切さとは、生まれつきのものでもなければ、教えられることのできるものでもなく、むしろ、命の大切さのそなわるような人々がいるとすれば、それは知性とは無関係に、阿弥陀の慈悲によつてそなわるものだということになるだろう」となります。



## 願 い

命という根本を考えると、その私達の思いも根本のところを考えると、すなわち、今ここにいる私は、自分の思いで、この世に生まれてきたという人はいないかと思えます。今から四〇〇年以上昔、フランスに有名な数学者がいました。その名はデカルト。彼の有名な言葉に「われ思う、ゆえにわれあり。」(「方法叙説」というものがあります。「われ思う、前に、われあり」ではありませんか。私たちの命は、私たちの思い、計らいを超えて、すでにこの世にあるのではないのでしょうか。

さらに言えば、その命はわたしたちの思いを超えて、どの命が優れているとか、劣っているということもなく、どの命もすべてこの「今」を築くには欠くことのできない命ということではないでしょうか。今こうして自分を省みようと作業をする私は、今まさにこの文章を読んでいただいています。省みる私には皆さんがいなければいけません。どの人一人として欠けてはいけません。

そうです、弥陀の慈悲、他力の真宗とは、あせらず、くらべず、あきらめず、命すべて生きてよしという、私たちの計らいを超えた、弥陀の本願、撰取不捨です。私たちが普段考えるような、病気が治りますようにとか、お金が儲かりますようにとか、そんなレベルの願いじゃありません。私たちの願いは調子がいいときはいいけれども、ちょっと思い通りにならないと、そんなはずじゃないといってあたふたします。

阿弥陀の願いだからこそ、願いに「本」がつかののです。どの命もすばらしい。そのままですばらしい、それが弥陀の本願です。悲願です。こんなはずじゃないというのを、空過といいますが、空過とはむなくすぎることです。その逆に、そのままですばらしいというのを、満足といいますが、そこで、天親は『浄土論』でこういわれました。

「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」仏の本願力を観たなら空しく生きるものはない。速やかに功德の大きな宝の海を満足する、ということですよ。

### 真宗の名告り

私の真宗との出会いは、児玉暁洋氏によるものです。その児玉氏から「六要鈔」取意として、「①真宗ト言フハ淨土宗ナリ、②真宗ハ即チ仏教ナリ、③般若ヲ以テ真宗ト名ヅク、④法華ヲ以テ名ヅケテ真宗ト言フ、⑤但シ真宗ノ名念仏門ニ其理有。於テ殊ニノリ大經ニハ説テ「真実之利」ト為シ、小經ニハ亦「説誠実言」ト言フ。一代教ノ中ニ実ニ凡夫出離ノ要道タリ。真実ノ宗旨其ノ義応ニ知ルベシ。」ということから真宗大谷派というものが単なる一宗派ではないと教えていただきました。それこそ、真宗は仏教だけでもない。宗教そのものが真宗であるし、真宗でなければ宗教でないとも言切れます。

さらに、親鸞聖人の浄土真宗というものが「信に知りぬ、聖道の諸教は、在世正法のためにして、全く像法・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乗けるなり。浄土真宗は、在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまうをや。」であることから、今まさに真宗のときであることは間違いありません。

そして、その仏教の、真宗の人生観は「遊煩惱林現神通」に尽きるでしょう。究極の遊びを追い求めるといえるか、皆さんから頂くことが、私の成仏道として、頂いております。まさに、この私の話も遊びになれば幸いです。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信

心を要とすとするべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。惡をもおそれるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえにと云々」

(聖典六二二頁)

## 附記

本論は、平成十七年度本研究所学外研究員紫英人氏の論考である。

現代社会において、真に生命力をもつ真宗文化の具体的な姿を探索し、併せて、本学園における宗教教育の原点を明らかにすることを目的とする本研究所にとって、その目的達成の第一に掲げる事業が「真宗文化に関する研究、調査、資料収集」である。研究員の本務は、この事業を完遂することである。

紫英人氏は医師であり、また僧侶という立場から、「青少年・医療・真宗―真宗の現代的意義」というテーマで幅広く論考を展開して研究員の本務に邁進された。氏の研究姿勢は、真宗文化の具体的な姿の探索という本研究所の目的にも、正しく合致するものである。

しかしながら対象として選び取られた分野があまりにも広範に及び、ややもすると焦点の定まりにくい感じが感じられる。加えて、研究論文としての体裁からも逸脱がみられ、むしろ評論とみなすべき傾向の強い仕上がりと感じた。

そこでこの度は、研究論文としてではなく、特別寄稿として受理し、研究所年報に掲載することとした。いずれ時宜を得て、課題の絞り込みとあるべき宗教観との照合によって、さらに深化した研究成果の公表されることを期待するものである。

寄稿受理にあたり、その経緯の一端を記す。

太田清史

(真宗文化研究所長)